

5. 資 料 紹 介

前川文嶺関係資料の肖像画と四条派流祖としての蕪村

平成21年度企画展「大倉笠山」では笠山(1784~1850)と同時期に活躍し、ともに『平安人物志』に登載された四条派の画家前川五嶺とその子文嶺に関する資料(前川文嶺関係資料)をあわせて展示した。所蔵者が木津川市在住であったこと、大正6年の文嶺筆「京華名所十二月画帖」に恭仁山荘で晩年を送った内藤湖南が題字を寄せ、宇治川の柴船図もあったことから南山城にもゆかりがあると判断したからである。また、笠山が化政期以降の京都で文人画筆頭の地位にあった中林竹洞の弟子にして詩や書では頼山陽の門人でもあった文人画家であったことと、天明頃に確立し近代京都画壇につながる円山四条派の一員で職業画家の典型とみなしうる五嶺・文嶺らのあり方を対比的にみる狙いもあった。

なお、前川文嶺関係資料は平成19年特別展「南山城の俳諧」で何来宛て蕪村書簡と文嶺による呉春筆蕪村像模本2種を紹介(図録に掲載)したが、他の資料は初公開である。

本資料で特に注目されるのは、蕪村・呉春・景文・五嶺・文嶺の5代にわたる画家の肖像画群である(右頁の写真と系譜参照)。

新しいものから見ると、文嶺像は一周忌を期して門弟の上原春嶺(本名藤三郎、西本願寺門前で仏絵師を家業としたという)が描いた。五嶺像は、画面上部に日輪・月輪に神仏を描いて「天照太神宮」「南無阿弥陀仏」と記し、自画賛(自作の和歌か)の下に合掌する姿で描く自画像である。元治2年(1865)の五嶺自画賛「数珠図」とともに(蓋面)「五嶺自画像」(蓋裏)「孫 孝嶺題(印)」と箱書された箱におさめられる。「数珠図」賛には「児童の時より画かく事を好ミ、親々のめぐみにて好る画を覚へ、拙き筆を動し、世を渡る事にいとまなけれハ」といった一節もあり伝記資料としても重要である。五嶺に関しては、

元治元年(1864)に起きた禁門の変による洛中大火ドンドン焼けの惨禍を描いた「甲子兵燹図」(明治26年の尊攘堂出版の模本が本資料にもある)、あるいは慶長3年(1867)の「ええじゃないか」図を含む「近世珍話」(京都国立博物館蔵)の作者として知られ、美術史よりも幕末社会史の分野で注目されてきたが、両図は信仰のあり方を含む画家の実像をうかがう絶好の資料となろう。前川家は画家として3代続いた(孝嶺の子息は西洋史家の前川貞次郎京都大学名誉教授)が、五嶺が創業者とみなされていたことは本資料中にある「白蓮之図」の孝嶺による箱蓋裏書「家祖五嶺画」からも明らかである。

さて、五嶺の師柴田義董は五嶺15歳の時に早世し師事は短期間であろうとされてきた(京都文化博物館『京の絵師は百花繚乱』)が、義董没後、松村景文の弟子になったことが本資料によって判明した。大正2年刊『文嶺画譜』の藤原重浪序に「前川文嶺翁の先考は五嶺翁といひて松村景文ぬしの高足」と記されている。本資料の呉春像・景文像双幅の筆者が文友・曾文と文嶺とともに「文」の字を共有することも彼らが景文につらなる一門であったことを暗示していよう。呉春・景文像の制作年は未詳だが、文嶺が呉春筆蕪村像を模写した明治26年(1893)が目安となろうか。

『文嶺画譜』を見ると蕪村の名作「闇夜漁舟図」に題まで模した「雨中漁舟」をはじめ蕪村画に範を得た作品が相当ある。「天橋立及び巖島記行」や「飛驒記行」で文嶺は暢達な画技ばかりでなく発句や狂歌も披露している。遺族の方によれば、孝嶺もかつて金福寺への墓参を欠かさなかったという。5代の肖像画は「画家の家」の系譜を語る絵系図であり、明治期の四条派の画家が蕪村を流祖と見た実例としても注目される。(伊藤 太)



前川五嶺自画像 前川五嶺自画賛 1幅
慶応2年(1866) 紙本着色 104.3×29.6



呉春肖像(部分) 森川曾文筆 1幅
絹本着色 100.0×41.5



松村景文肖像(部分) 国分文友筆 1幅
絹本着色 100.3×41.5

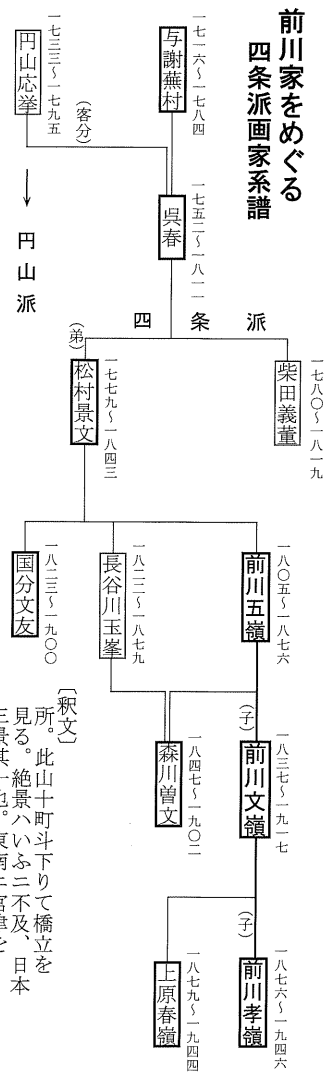
双幅仕立てで一つの箱におさめられ、無賛・無署名だが箱書に作者の自署がある。呉春像は岡本豊彦筆の像(大阪市立美術館蔵)に酷似し、その写しか粉本を同じくするものであろう。(箱蓋表書)「呉春先生像・景文先生像 永昌社蔵」(箱蓋裏書)「呉春先生肖像/曾文森川絢謹写併題函面(朱文方印)/景文先生肖像/文友国分定胤謹写併題函面(朱文方印)」



前川文嶺肖像(部分) 上原春嶺筆 1幅
大正7年(1918) 絹本着色 111.5×40.3

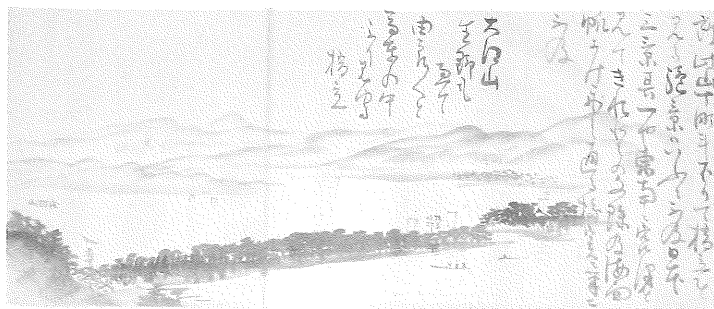
〔釈文〕 有かたき神の御国に生れ来て
ほとけの国に帰る嬉しさ

丙寅年六十一歳
五嶺写



〔釈文〕 此山十町斗下りて橋立を
見る。絶景ハいふニ不及、日本
三景其一也。東南ニ宮津を
見てきれとの文殊及海面
帆かけ船之通る様 実ニ筆ニ
不及。

大江山
生野も
過て
由良くと
馬車の中
より見ゆる
橋立



天橋立及び叡島記行(部分) 前川文嶺筆(文とも) 1巻
明治26年(1893) 紙本墨画 20.3×510.4